
鬼灯さん家の戦闘事情

白蜜印のメイド漬け

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鬼灯さん家の戦闘事情

【Nコード】

N7823X

【作者名】

白蜜印のメイド漬け

【あらすじ】

暴力姉から逃げるように立ち立ちした鬼灯優作だが、新たに赴いた学院で姉の燐子と再会してしまう。しかも、燐子は学院長で、さらにはここは男子禁制の女学院だった！

其の一 / 鬼灯さん家の戦闘事情

四畳半のリングで格闘する姉弟がいた。

「はあっ、はあっ」

妖艶な息遣い。

「ね、姉さん！ そろそろ限界だっ……！」
迸る汗。

加速する淫靡な世界

ではなく。

「何言つてんだ、テメー。限界かどうかの判断は、姉ちゃんに委ねられているんだよ！」

暴力の世界。

「んなバカなっ!？」

暴力というのは語弊があるか。

この二人は姉弟。つまりは家族。そう、これは家族のコミュニケーションションなのだ。

「バカ？ テメー誰に向かって言つてんだ、ゴルア！」

恫喝する姉の口調は、完全に表舞台に立つてはいけない人達の口調だった。

手足をホールドした状態から一気に逆海老反り状態へ。

「ぐはあ！ 苦しい！ ギブギブ！」

引き締まる腕力に限界を感じた弟が、畳を叩きまくる。

「だから何度も言わせんな。限界かどうかの判断は、姉ちゃんが決めるんだよ!!！」

グギギギ！

今日一番の力で、姉は弟をホールドした。

なつてはいけない鈍い音が　バキッ！　弾けた。

「ん？ 変な音がしたな」

何気なく見た弟の顔は青ざめていた。手足も痙攣してて、口から

泡まで吹いている。

「何だ。骨が折れただけか」

蔵密には失神付きだ。

そして、訂正しよう。

これは、家族のコミュニケーションではない。ただの暴力だ。

そう　彼、鬼灯優作の姉、鬼灯燐子は、人を玩具にするのが大好きな　とてつもなくサディスティックな悪魔なのだ。

行き過ぎた愛情ではなく、ただ単に自分が楽しいからやるだけ。世界中に共感を求めても、ほぼ全員がこの趣味を理解できないだろう。

そんな暴力姉から逃げるように、弟の優作は、高校入学を機に独り立ちをした。

「……こ、ここなのか？」

燐子から渡された地図は、どうやらここを示している。間違っ
てはいないようだ。

東京ドーム二つ分の敷地面積に埋められた白い丸石。

社寺を彷彿とさせる造りの木造建ての学び舎。

女性恐怖症というトラウマを抱えながら赴いた、その学園が掲げる表札を見て、優作は愕然とした。

私立妖蘭女学院。

「女子高生じゃねえか！！」

思わず、声を大して叫んだ。

「その通りだ」

遠くから、聞き馴れた声が届く。

まさか　！？

突き刺すように視線をそちらに向けた。

正面。境内の中心。

広大な敷地の中心で、腕を組んでほくそ笑む

「り、燐子姉……」

実の姉の姿が。

「ようこそ新入生。私がこの学院の王、鬼灯燐子様だ！
吹き荒ぶ春の風。」

満開の桜が踊るその中で、優作は青春と別れを告げた。

其二ノ鬼撫手と鬼灯家

八畳の畳部屋で、青年が正座をしていた。

外見から感じるものは何もなく、髪型といい格好といい、取り分け特徴というものがない。

いずれにせよ規律には反していないので、ごく普通の好青年と言っ
ていいだろう。

鬼灯優作。今年で十六になる高校一年生だ。

彼はこの春から、姉の薦めで私立妖蘭学院に入学することとなっ
ていた。

推薦という形ではなく、彼の實力での入学だ。

ところが来て早々、あれやこれやの問題続き。

まず。

「なんで燐子姉が学院長をやってるんだよ」

若干の怒気を放ちながら、優作は言う。

八畳の畳部屋である。ところどころに茶道具が見られる。壁には
立派な掛け軸が立てかけられており、その手前の段にはこれまた立
派な壺がある。

そんな和で尽くされた部屋に、浮いた存在がいた。

姉の鬼灯燐子だ。

血に染めたような真っ赤な長髪と、見たもの全てを石化させるよ
うな、美しさと危険を同居させた瞳。

格好こそ赤ジャージだが、外見から感じるオーラは弟のそれを遙
かに上回る。そもそも弟は一般人のそれすらも下回っているが。

「誰が底辺だ！」

「ついに頭の悪さが心にまできたか」

燐子姉は呆れ顔で、目の前の机上に一枚の紙を出した。

細長い一枚の紙には、受験の際に受けたテストの点数が教科別に
書かれていた。

「誰だ、こんな酷い点数取ってるのは」

「お前だよ」

クールな目つきを突き刺し、同時に二本指で弟の目を突いてやった。

「ぎゃあああ！ 目があああ！」

畳の上を転げ回る哀れな弟に、姉が悲惨な現実を告げる。

「こんな白紙で出したも当然なテスト結果じゃ、どの学校も受からないから、私がここに入れてやったんだよ」

優作は飛び起き、すぐさま正座をした。

姉を、いや、学院長を見て、抗議する。

「家で弟を道具にしていただけの隣子姉が、どうしてそんな大層な立場になってるんだよ」

「元々、この学院は私のものだからな。正確には、鬼灯家のもの。」

私は面倒だから代理に任せてたんだよ」

「面倒……そんな理由が通るのか？」

「面倒って言っても、別に年がら年中、タダ飯食って寝てたわけじゃないだろ。お前を鍛えていたからな」

「言えば何とでもなるもんだ」

二本指、スタンバイ。

「もう一本いつとくか？」

追加で一本。

「三つ目は通りません」

話を戻して。

「そもそも話から気付けないのか？ 鬼灯家のものというところは、つまり “鬼の末裔” がいるってことだろうが」

鬼灯家は代々、鬼と良き相互関係を保っている。

そんな鬼灯家を古来より、凶暴な鬼を手懐けることから

「鬼撫手ひなみの育成をしてた……って言いたいのか？」

鬼撫手と呼ぶ。

「事実、そうなんだから仕方ない」

燐子姉は言う。

「ここ、私立妖蘭女学院は　お前を立派な鬼撫手にする為に存在する」

「燐子姉……」

しかし、待った。

「だからって、女学院に入れるなよ！　どうやって説得させたかは知らないが、俺は男なんだし、そもそも　俺は女性恐怖症なんだからな」

「説得？　何言ってるんだ？」

耳を疑うような発言だ。

「……マジ？」

「説得は、お前がやれ。その為の鬼撫手だろうが」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7823x/>

鬼灯さん家の戦闘事情

2011年10月26日02時07分発行